移住するなら、
横芝光町。

千葉県の九十九里浜沿いにある横芝光町 移住/定住 GUIDE BOOK

位置・地勢・気候

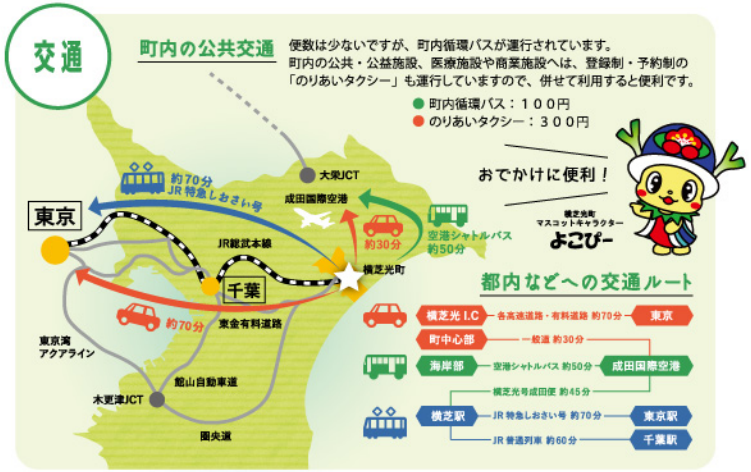
千葉県北東部に位置し、九十九里浜に面する横芝光町。形状は東西約5km、南北約14kmと細長く、面積は67.01㎢です。かつては上総、下総の国境でもあった、九十九里平野における最大の河川・栗山川が、町の中央部を北から南に向けて流れています。黒潮の影響を受ける気候で、年平均気温15度、年間降水量は約1500mmと、夏は涼しく、冬は暖かい海洋性気候がとても暮らしやすいところです。この温暖な気候により、様々な農畜産物が生産され農業が盛んな町です。

交通

町内の公共交通

便数は少ないですが、町内循環バスが運行されています。
町内の公共・公益施設、医療施設や商業施設へは、登録制・予約制の「のりあいタクシー」も運行していますので、併せて利用すると便利です。

- 町内循環バス：１００円
- のりあいタクシー：３００円



移住定住サイト
yoridokoro.chiba.jp

公式Facebook
@yoridokoro.jp

公式Instagram
@yoridokoro.jp

お問い合わせ
横芝光町 移住定住サポートセンター
〒289-1732 千葉県山武郡横芝光町横芝1355番地2
TEL：0479-74-8585／FAX：0479-74-8586
MAIL：info@yoridokoro.chiba.jp

横芝光町
YOKOSHIBAHIKARI

生きるを、クリエイトしよう。

都市の魅力にとらわれない、新しい価値を見つめる人たちへ。
いま、地方へ移住する人たちが増えています。
あなたも、自然の中で「創る」「生み出す」暮らしをしてみませんか？

横芝光町は、まだまだ成長途中です。
必要なものは、みんなで新しく生み出しています。

自然と調和しながら、自分たちで暮らしをゼロから創造する。
その暮らし・生き方そのものが、町をつくってゆくのです。
ここに住む、すべての人がクリエイターだから。

ひとりではありません。
この町には移住をサポートする「ヨリドコロ」と、
そこに集まる「人」がいます。

人と人とのつながりの中にこそ、生まれるものがある。
そして、海、土、川、空…自然と共に生きることで、人は本来の輝きを手にできる。
何より、こどもにはおおきな海が似合います。

ここで、豊かな未来を共にクリエイトしてみませんか？

写真家：関 健作（九十九里浜にて撮影）

クリエイティブに活きる、人や自然との豊かな関わり

YUGEN GLASS
由元 信吾さん/裕美さん

移住を後押しした、不思議な「ご縁」と「直感」

信吾さん(以下、信):横芝光町への移住を決めたきっかけは、ひとことで言えば「ご縁」があったからですね。ガラス作家の友人のご両親がこの土地を別荘として持っていて。見学させてもらった瞬間に「ここしかない!」って直感が走りました。趣味でサーフィンをしている自分にとっては、歩いてすぐ海に行けるというのもグッとくるポイントだったんです。海に行くまでの細い道や、空の広さといった周辺の雰囲気も、自分の好みにぴったりでした。

自然環境とクリエイティブはリンクする

信:移住して思うのは、自然環境とクリエイティブはリンクするということ。吸っている空気や見ている景色、日の光など、この町で感じるすべてが体を伝わってガラスの表現として出てくるんです。裕美さん(以下、裕):私はこどもができてから「スマイル」とか「家族の幸せ」「愛」などを作品のテーマに掲げることが増えました。信:それもたぶん、この町の豊かな環境は、考え方にも大きな影響を与えているように思いますね。

楽しさと暮らしやすさに満たされた環境

信:毎年夏になると友達家族が遊びに来て、うちの庭にテントを張って、海で遊んで、バーベキューして、吹きガラス体験もして楽しんでます。裕:ご近所さんも本当に優しい人たちばかり。こどもを可愛がってくれたり、野菜をおすそ分けしてくれたりするんです。移住してきた方も多いし、気候だけじゃなくて、人も暖かい。あと、こどもが友だちと出かけるときは、こどもたちや友だちのご両親に「何かあったらここに避難する」という声かけを欠かさないようにしていますね。

「Golden Wave(マジックアワー)」をイメージしたグラス作品。

庭にある工房にて、夫婦二人で製作活動をしている。

2人のこどもを育てるIターン家族。

自分が動けば、面白いことは自然とやってくる

株式会社なんじゃもんじゃリゾート
秋葉 香織さん(写真左)
—
株式会社アグリスリー
實川 真由美さん(写真右)

最初は「何もない町」だと思っていた

實川さん(以下、實)私は20歳のときに嫁いで、この町にやってきました。梨、お米、野菜を育てたり、お店の経営、学校へ行って食育の活動などをしてます。秋葉(以下、秋):私は環境問題や国際協力などの社会的メッセージを込めたイベントや商品を企画プロデュースする仕事に取り組みながら、現在は夫が事業承継した宿泊施設の経営もサポートしています。27歳のときに嫁いできて、最初の3年間は本当に辛くて(笑)。知り合いもいないし、「この町には何もない」って決めつけていました。

町と交流したら、考え方が180度変わった

秋:きっかけは、震災から。こどもの近くで仕事ができるよう在宅ワークへシフトしました。あるとき、この辺りをドライブして回ってみたら、素敵なお店、人、自然もあることに気づいたんです。實:私は3人のこどもたちを保育園に預けるようになってから自分の時間ができて、「そういえば農業が好きだったな」ってことを思い出したんです。そんなタイミングで、町の中で若手女性の農業団体をつくらないかという話も出てきて、そこから積極的に町との交流がはじまり、生活もどんどん楽しくなっていきました。

この町の人と自然が、こどもを大きく育んでくれる

實:「ここの花が咲いたよ」とか、都会に住んでいるとなかなか気づくことのできない四季の移ろいをこどもたちが敏感に感じとってくれているのが、とてもいいなと思います。秋:生活の知恵のつき方も全然違うなって感じます。たとえばおじいちゃんが、当時1歳だった息子にトンカチとクギを持たせて、「大丈夫だからやってみろ」と教えてくれるんです。ここで生活しないと得ることのできない自然や食、人々との交流がある。それが、横芝光町の魅力だと思いますね。

秋葉さん夫妻が経営する「コテージ&ペンション NANJA MONJA」。

實川さんが経営するコミュニティカフェ&農家のキッチンラボ「FARM TO...」のメニュー。

歳も境遇も近く仲の良いお二人。定期的にママ友たちで集まっては楽しく盛り上がっているそう。

INTERVIEW #03

鍼灸師いまにし
今西 倫子さん

都市と田舎の「いいとこどり」の生活を

きっかけは、愛犬。「都心へのアクセス」と「土地の広さ」に魅せられて

家族は、私と夫、大型犬2匹と中型犬1匹と大所帯だったので、住んでいた柏市のマンションではとても手狭なのが悩みだったんです。そこで、「週末だけでも犬たちを自由にしてあげたい」と思い、別荘として使える場所を探しているうちに、今住んでいる場所を見つけて。「柏市から通えて、土地が広いところ」という条件を優先して選んでいたので、当時は横芝光町のことはまったく知らなかったんです。でも、通えば通うほどこの町のことが好きになって、本格的に移住することを決めちゃいました。

驚くほどの夜空の星、生き物たちの数々

横芝光町に来て、まず驚いたのが自然の豊かさ。たとえば木戸浜はウミガメの産卵地として有名ですし、用水路には淡水魚のタナゴがたくさん泳いでいます。私には娘がいまして、その夫がずっと都会暮らしだったのでタナゴを飼うのが昔からの夢だったんです。だから遊びに来た時は、目の色を変えてタナゴを釣り上げていました。また、広い庭でキャンプベッドを敷いて星観察を楽しむこともできます。泊まりに来た娘や孫、友人が心から「きれい」「すごいね」と言ってくれると、私たちも嬉しくなってきますね。

施術室を完備！「移動型鍼灸院」で癒やしを届ける

横芝光町に移住してからは、長年勤めていた証券会社を退職し、移動型の鍼灸院を開業しました。施術を必要とされている方は足腰が弱っているケースがほとんど。軽自動車で訪問するスタイルにすれば田舎の細い道でも小回りが利きますし、施術が終わった後も車内でゆっくりと休憩していただけます。東京は魅力ですが、やっぱり疲れを感じます。夜になっても車は走っているし、明かりは消えないし…。ここは東京からそれ程遠くない上に、田舎の心地良さを享受できる場所なんです。

55歳まで大手証券会社に勤めた後、全国でも類を見ない「移動型鍼灸院」を開業。

広い庭では、ドッグラン、BBQ、キャンプを楽しむこともできる。

「大きなストーブの上にやかん」という風景が、なんだか懐かしく心地いい。

INTERVIEW #04

TREASURE SURF
代表兼インストラクター
水野 恵一さん

波は人生と似てる。一瞬ごとに表情を変える自然を楽しもう。

サーフィン業界に染まらないことがプラスになった

サーフィンはもともと危険と隣り合わせのスポーツですが、震災以降は、命を守るためにはどうすればいいか、より真剣に向き合うようになりましたね。現在はスタッフとお客さま全員にトランシーバーを持たせるほか、プロサーファーの方に師事したり、資格を取得したりしています。サーフィン業界でまともに働いたことがなかったというのは、私にとっては幸運でした。業界に染まっていなかったからこそ、いろんな方の意見や指導に耳を傾けることができたのだと思っています。

"揺れている世界"を受け入れる

「波が自分に合わない」と考えるのではなく、揺れている世界を受け入れて、「自分を波に合わせていく」。すると、安定した波の使い方のようなものが見えてくるんです。少し、人生と似ていると言えるのかもしれません。海に囲まれた日本で暮らす私たちには、生来から海や波を楽しむことのできる資質があるのではないかと思うことがあります。横芝光町のいいところは、毎日の生活の中で、ふらっと海に出かけられること。朝日や夕日を眺めたり、季節ごとに表情を変える波を楽しんだりできるんです。

こどもたちに、地元の思い出を

都会に憧れる人たちだって多いと思います。ただ、小さい頃からこの町の自然に触れて、遊んでもらえれば、どこかのタイミングで田舎の良さに気づいて戻ってきてくれるかもしれません。「地元の海で楽しんだ」っていう思い出さえつくれればいいなと。「郷土教育」の機会を増やしていければ、この町を好きと言ってくれる人も増えるのではないかと考えたりするんですよね。現状に満足せず、今よりもっともっと、こどもたちに海や波のことを教えていける機会をつくっていければと思っています。

生まれも育ちも横芝光町。年間約4000人の指導にあたっている。

1年を通して、サーフィンのレッスンを受けることができる。

ビーチのクリーン活動、こども向けの教室など、地元への貢献は惜しみない。

移住・定住したい人の「ヨリドコロ」がここにある

移住定住サポートセンター
移住コーディネーター
—
井上 富雄さん（写真左）
鈴木 直人さん（写真右）

「町と関わろう」と思ったら、すぐつながった

井上さん（以下、井）：私は25年ほど前にこの町に移住。東京での仕事を引退した後、昔から知り合いだった町長に住む町を良くしたいと相談してみたところ、「面白い人がいるので会ってみない？」と言われて紹介されたのが、観光協会の方だったんです。鈴木さん（以下、鈴）：私は、妻の実家が横芝光町にあるので、結婚を機に移住しました。町で仕事をする機会を増やそうと考え町に相談したところ、「町おこしを一緒にしよう」と、タウンマネジメントのチームに誘っていただき、現在に至ります。

「訪れる→交流する→移住する」の流れをつくる

鈴：移住をしていただくためには、まず「訪れたい」と思っていただくことが大切だと考えています。その次に「交流したい」→「移住したい」となる。この流れをつくるために、町のさまざまな魅力を発信し、町民と交流できるイベントもたくさん開催していきたいですね。井：この一帯は自然が豊かなので、野菜や肉、魚など、新鮮でおいしい食材がたくさんそろっているのも魅力です。ただ、アピール下手というか…対外的な発信がまだまだ弱いと感じているので、今後はもっと積極的にアピールしていきたいと考えています。

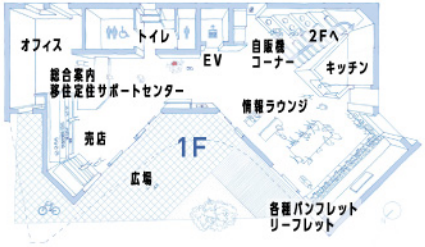
こども、おとな、みんながずっと住みたくなる町へ

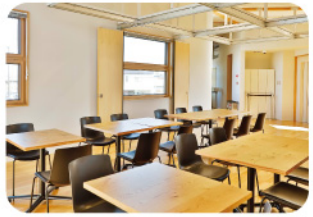
鈴：この町を「子育てがしたい町」にしていきたいと考えています。たとえば、この町でこどもとすれ違う時に、「おはようございます」って挨拶がにこやかに生まれたりするんです。都会では希薄になっているものが、この町にはまだ残っている。そういうところがすごく好きですね。井：私たちは「移住」だけではなく、「定住」についてもサポートする立場。移住してきたけれど、なかなか地域のコミュニティに入っていけないと感じている方のお悩みにも応えていきたいです。

横芝光町の情報がすべて集まり、移住定住もサポートする横芝駅前情報交流館「ヨリドコロ」

ヨリドコロ概要情報

［開館時間］
総合案内｜9：00〜18：00
情報ラウンジ（待合所）｜8：00〜20：00※季節により変更有
［休館日］年末年始及び館内整理日（不定期）
［施設情報］
〈1F〉
総合案内｜観光・飲食店・宿泊施設・特産品などまちの総合案内
移住定住サポートセンター｜移住希望者向けの総合サポート
情報ラウンジ（待合所）｜無料wi-fiが利用できる情報ライブラリーや電車・バスの待合スペースで軽食も提供
売店｜飲み物や特産品の販売
レンタサイクル｜5台完備
トイレ｜オストメイト付き多機能トイレ
〈2F〉
多目的スペース（待合所）｜誰でも活用できる多目的なスペースでレンタル可能





2階は多目的スペース（待合所）となっている。

ヨリドコロ1階には、地域の特産品売り場から、飲食スペースまである。

施設のロゴは東京2020オリンピック・パラリンピックのエンブレムをデザインされた野老朝雄氏が手がける。

一緒に町を回ってくれたり、美味しいお店の紹介もしてくれる。

町の魅力発信だけでなく、求人情報、不動産情報もカバーする。

住む前だけじゃなく、住んでからのサポートも。地域に馴染むかどうかも、移住にとって大きな課題。

\ PICK UP TOPICS /

ウミガメさん、こんにちわ

木戸浜海岸はアカウミガメの産卵地。他にも海では町の鳥：コアジサシの群れが飛び交い、ハマヒルガオが咲いています。

みんな大好きソーセージ

日本ソーセージの父：大木市蔵をルーツに、美味しいソーセージやもつ鍋がソウルフードになっています。

モンベルフレンドタウンで遊ぼう！

町の中心を流れる栗山川では、釣り、カヤック、SUPなど、様々なレジャーを一年を通して楽しむことができます。

夏、鬼がやってくる！

全国で唯一の古典的仏教劇「鬼来迎」。毎年8月16日行われる、地域で代々受け継がれる民俗芸能です。

絶景！九十九里浜ならではの初日の出

浜の会場では観光まちづくり協会による甘酒やお汁粉の振る舞いもあり、毎年たくさんの人が訪れます。

桜もいいけど、梅もいい

坂田城跡の梅林で、毎年「梅まつり」を開催。県下最大級の梅林、凛とした純白の花を咲かせる約1,000本の巨木は圧巻です。

横芝光町の子育て

-施設や制度の紹介-

健康づくりセンター「プラム」

母子健康手帳の交付から、健康診査、相談、保健指導、保育園の入園手続きなど、横芝光町の健康・保健サービスや子育て支援の総合窓口です。

不妊治療費助成

特定不妊治療を受けられた方に、治療費の一部を助成します。

さくらんぼCLUB（子育て教室）

近所に友達がいない方、相談相手が欲しい方、みんな同じような悩みをもっています。妊娠中の方や子育て中の方、離乳食や乳歯の手入れなど赤ちゃんのために役立つお話や、お母さんがリラックスできる活動を行っています。

こども・児童医療費助成事業

横芝光町では、県の制度に加えて独自の助成によって、出生の日から高校3年生までのすべてのお子さんの医療費を無料化しています。

給食費無料

小中学校に通うすべてのお子さんの学校給食費を無料化しています。

子育て支援センター

体験保育、園庭開放、親子の集い、一時保育、サークル活動、育児相談や産褥ボランティア、生け花や茶道のリフレッシュ活動まで、地域の子育てママを支援する拠点施設がご利用できます。

子育て日用品助成券支給事業

新たにお子さんが生まれた保護者に子育て日用品（紙オムツ・粉ミルク）を購入することができる「子育て日用品助成券」の支給を行っています。

エンゼルヘルパー派遣事業

妊娠期から満1歳未満のお子さん（多胎児は1歳6か月未満）がいる家庭で、昼間に日常生活を援助できる人がいない方へ、ヘルパーが家事の援助を行います。

放課後児童クラブ（学童保育）

授業の終了後や、土曜日、夏休みなど学校が長期の休みの期間中に、保護者に代わり児童の保護や生活指導などを行います。

INTERVIEW #06

人が集まる場、創造できる町

写真家
関 健作さん（写真左）
—
株式会社みかんぐみ
加茂 紀和子さん（写真中央）
—
横芝光町シティマネージャー
鈴木 雅之さん（写真右）

3人の視点から見た横芝光町の印象とは？

加茂さん（以下、加）：まず敷地を視察して思ったのは、駅前に何もないということ。タクシープールはあるんですが、お店がなくて、人の居場所もない。正直、そんな印象でした。関さん（以下、関）：僕はこの地域で生まれ育ったんですが、当時は横芝町と光町が別々で。横芝町が都会、光町は田舎、というイメージがありましたね。鈴木さん（以下、鈴）：この町は、人が素敵ですね。最初の頃は心配していたんですが、よそから来た私のことも温かく迎え入れてくれました。

横芝光町の「人の活力」には秘密があった

鈴：この町と他の町との大きな違いは、人が「元気」だということ。押さえつけられていないと言うか、おおらかで寛容な風土があるんですよね。加：私も同じことを感じました。「ヨリドコロ」は、オープンしてすぐカフェや売店がきちんと稼働していて、とても驚きました。建物の設計の時点でも、商工会の方たちからとてもポジティブな意見をいただいたんです。関：この町にはクリエイティブな人や移住者が多くて、仕事がうまくいっていない時期、そういう人たちにたくさん相談に乗ってもらいました。

「やりたい」を実現し、関わりを生む場所

加：「ヨリドコロ」をつくるにあたって大切にしたのは、自宅のように心地よい場所であること、たくさんの人を受け入れられること、という2点です。鈴：この町を良くしたいと思っている多くの人たちが、町と関わりをもてる場が必要だと感じていました。やることを何かひとつに絞る必要はなく、逆に何だっていいんです。関：この町にも、素晴らしい人はたくさんいらっしゃるということを、どんどん発信していきたいですね。

ブータンで暮らしていたこともある、地元出身の写真家：関さん。

ヨリドコロの建築デザインを担当した、みかんぐみ：加茂さん。

横芝光町のシティマネージャーを務める、千葉大学の鈴木准教授。